さくらんぼがり　2

さくらんぼがり　2

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19894215

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, エク霊

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回はエク霊です。♡喘ぎを含みます。良ければどうぞお付き合いください。倫理がアレです。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

さくらんぼがり　2

「写真にいつも同じ女性が映るんです」
それは心霊写真の相談として持ち込まれたものだった。
が、芹沢が『これ幽霊じゃないです』と言い切った瞬間、相談所の面々は別の意味でゾッとした。
おそらくその白いワンピースにボサボサの髪の女性は、依頼人のストーカーだからだ。
霊幻はすぐ警察に相談するように言って、一度は依頼人もそれで納得した。
が、実際に何かをされたことが無ければ、ストーカーとして認定できないと言われたと再度相談に来たのだ。
「何かあってからでは遅いのに……分かりました、我々でできる対策はしていきましょう」
霊幻は自分の唇に触れてしばし考える。
「この女性に見覚えは？」
「あると言えばあるし、無いと言えば無い、というか……」
「というと？」
「私、仕事がコンビニの社員なんです。レジにも入ります。こういうお客様がいらっしゃった気もしますし、いなかった気もしますし……」
ふむ、と霊幻は難しい顔をした。
「相手の目的が恋愛成就でも充分怖いですが、恨みの場合もありえるのがより怖いです」
ひっ、と依頼人は声をひきつらせた。
「今度、偽の恋人を連れて見てみましょう。恋愛系のストーカーなら動きが出るでしょうし、恨みならそれと分かるでしょう」
何か嫌がらせが始まれば、いい気持ちはしないとは思いますが、警察も動いてくれるでしょう、と霊幻は続ける。
「どうもこの女性は頭が回るみたいだ。この相談所には近づかないですし、××さんが誰か友人といる時に近づいています。おそらく騒がれないようにでしょう」

芹沢も難しい顔をしている。女性が付きまとうだけで依頼人に危害を加えなければ正当防衛も成立しないので、芹沢も何もできない。が、何かされた時には手遅れなのだ。
「何かある前に、行動した方がいい。明日偽の恋人を用意します。またいらしてください」
依頼人をかえして、霊幻はチラッと壁掛け時計を見る。
「モブのやつ、約束の時間になっても来ねえじゃねぇか」
「いやお前なんでか分かってるだろ」
呆れた声をエクボは出す。
「散々食い散らかして最悪のフリ方しやがって。そりゃ顔も見たくないだろうよ」
むう、と霊幻は黙り込む。
「……俺、そろそろ学校の時間なんで」
事情を知ってる芹沢も冷たく言い放って席を立つ。
「……いいじゃねぇかよ、童貞捨てれたんだからさ」
ビキリと茂夫の友人であるエクボの額に青筋が立つ。
「てめぇ、その内天罰が下るからな」
きょとん、と霊幻はエクボを見上げる。
エクボはその霊幻を『こんなやつの何処がいいんだか』とマジマジと見つめて、ギョッとした。
触り心地の良さそうな肌に、薄いがぷるりとした唇。
（童貞ならヤらせてくれる）
思わずエクボの喉が鳴る。サせてくれる奴というのはそれだけで魅力的なのだ。
「エクボ？……今、何かやらしーこと考えただろ」
「ば、ば、っか言えっ……！」
「貰ってやろうか？お前の童貞」
霊幻の舌がゆっくりと唇を這う。
「お前、男は初めてだろ？」
そう言われてエクボは推し黙る。確かに男を抱いたことは無い。
「アナル童貞、貰ってやるよ」
霊幻の目が挑発するように細まる。
「……後悔すんなよ」

「お前こそ、初めてが俺でいいのか？」
「はんっ、お前がそんな奴だってことをシゲオに言えて丁度いい」
そう言えば腰も抱き心地が良さそうだ。肉付きも悪く無い。

奥を犯せば、どんな声を漏らすのだろうか。

そう考えてしまったエクボの視線が、舐めるようにデスク・チェアーに座る霊幻の肢体を這う。

「し　ご　と　お　わ　っ　て　か　ら　だ　ぞ」

そう紡ぐ唇にも、ぶち込みてえ。
完全にオスの欲望に支配されたエクボは、霊幻の後ろ髪に指を差し込み、頭蓋骨を掴んで上を向かせて口付けた。
「ん……」
脳が痺れる。トロリと甘い口の中は、優しくエクボの行為を包み込む。
「ん、んぅっ、ふ、う、」
淫靡な水音が相談所の中に響く。
霊幻はエクボの首に指を滑らせ、スーツの背中に皺をつけた。
「は、ぁ……っ」
ようやく離した唇の間には唾液が糸を引いて。
「……いけない子だなぁ」
至近距離でくすりと笑って甘く囁く霊幻に、たまらずエクボはもう一度口付けた。

※

ホテルに着いて、エクボは「俺様何やってんだろ」と冷静になる。
が、服を脱ぎ始めた霊幻を見て、「ああそうかこいつにワカラセるために来てたんだっけ」と理性が麻痺した。
ヤれる。ぶち込める。本能がそれを思い出してしまったのだ。
「お風呂一緒に入るか？」
服をかいがいしく脱がされながら聞かれて、思わずエクボは頷く。

シャワーに打たれながら犯すのも良さそうだ、と。
「何かエッチなこと考えてるだろ。風呂ではヤらせねーからな？でも」
すり、とズボン越しに股間を撫でられてエクボはぞくりとした快感に顔を歪める。
「洗いっこしような♡」
ふわりとシャンプーのいい匂いをさせながら耳元で囁かれて、エクボはくらくらした。
目の前のいやらしい肢体を思う存分撫で回せる。それが楽しみで仕方なくなった。
「準備してから行くから、先に入っててくれ」
トイレに消えた霊幻を見送って、エクボは先に風呂場に入って湯船に浸かる。
（ラブホの風呂ってのは何でこう無駄に光るんだ？）
湯船の湯で顔を洗いながらエクボはひとりごちる。
「おまたせ〜」
ちょっと気怠そうにした霊幻が入ってきて、湯船に飛び込んでくる。
「エクボ♡」
とろけるような瞳でそう言われて。

こいつ俺のことが好きなんじゃねぇか？

エクボはそう思ってしまった。
そもそもおかしいのだ。童貞ならヤらせてやるなんて。シゲオの時には酔って前後不覚だっただけで、本当は俺様のことが好きなのでは？
悪霊はニタリと笑う。それなら、どれだけ酷くフッてやろうか、と。
親友の敵討ちができる、とエクボは嘲笑った。
「お前さん、俺様のことは好きか？」
「ん？好きだぜ♡」
ちゅ、ちゅ、とエクボの首筋や胸元に愛おしげに唇を落としながら

霊幻は返す。
「好きじゃなきゃヤらせない」
ふわりと微笑む霊幻に、きゅううと無いはずの心臓が締め付けられた。
「霊幻……！」
「あ……っ♡」
エクボは霊幻を抱きしめてめちゃくちゃに身体を撫で回す。
「あらたかって呼んで……っ♡」
「……っ、新隆……っ！」
口付けて、指先の雫で髪の毛を濡らす。
愛おしさが止まらなかった。
こんなところに、こんな素晴らしいものがあったのか、とエクボは悔しい思いでいる。
湯船から上がって、口付けながらお互いの身体を泡で彩っていく。
「ぁっ♡えっちぃっ♡」
ふとももを泡で撫で回されて、ピクンと霊幻が身を捩る。
「あっ♡ああんっ♡」
身体中どこもかしこも、敏感だ。エクボは怒張を霊幻にしごかせながら、息を荒くして霊幻を弄んでいた。
「ね、も、ベッド行こ……♡」
はぁはぁと息を上げて霊幻が誘う。
「おう」
エクボはシャワーを手に取って、霊幻の身体から泡を流してやる。
そのほんのり色づいたうなじにたまらなくなって、唇を落とした。
「あ……っ」
チュ、と吸い上げて跡をつける。
所有印に思ったより満足してしまう自分に、エクボの頭の中の何処かでけたたましく警報が鳴っていた。
が、それを掻き消すように、ベッドに横たわった霊幻が足を広げる。
「ココ。思い切って挿れてくれればいいから」
くぱ、と縦割れアナルを指で広げて誘う。
「ちょっ、と、待て」

コンドームをせわしなく開封して装着して、エクボは硬度を確かめるように自分の逸物を数回シゴく。
バッキバキだった。
（そういや久しぶりだった）
そう思いながらぴと、と先端を誘われたアナルにつける。
「……挿れるぞ」
「うんっ♡」
ぐぷ、と先端を埋め込んで。
「ぁあっ♡♡♡」
──童貞を喰った歓喜に、霊幻の背中がベッドから浮いた。
「おっき、ぃっ♡すごっ……ぁんっ♡♡」
ズパン、と一気に奥まで穿たれて、あられもない声が霊幻の喉から漏れた。
「くっ……こいつ、は……っ！」
とんでもない名器だ。
エクボはすぐイってしまいそうなのを必死に耐える。
ザラザラした天井に、吸い付くような内部。奥のウネリもヤバい。
「ダメだ、イく……っ！」
「うん♡俺でイってぇっ♡♡」
数回腰を振れば、エクボはあっけなく達してしまった。
「ぅぐっ……」
搾り取られる感覚に、身震いする。
「……あは♡」
霊幻は満足そうに笑って、いそいそとエクボのコンドームを外す。
「どーてー卒業、おめでとう♡」
縛ったゴムの中のザーメンにキスしながら、うっとりとそう言った。
「……っ」
「あんっ♡」
たまらなくなったエクボは霊幻を押し倒して、またせわしなく挿入する。
今度は一回出しているのでそんなに早くはイかない。
ずちゅずちゅと熱い内部を楽しんでいると、霊幻がある１点で鋭い

声を上げた。
「やぁっ！？」
目を見開いた霊幻に舌舐めずりして、エクボは腹側のその１点をゴツゴツと亀頭で責める。
「ぁんっ！あ、あ！やだぁ、ダメぇ……っ！」
「声から演技臭さが消えたな？」
悪霊らしく笑いながら、エクボは責苦を続ける。
「ゃ……っ！クる、イ……っ！」
ぎゅう、と霊幻の腹筋に力が入って。
「……メスイキ、しちゃった……」
ひく、ひくと震えながら、口を尖らせて言う霊幻にエクボはゲラゲラと笑う。
「ざまあねえな。もっとヒンヒン言わせてやるから覚悟しろよ」
「えっ！？あ、や、だぁっ！！」
逃げようとした身体を押さえ込んで、エクボは今度はさっきの一点と奥を交互に突く。
「ひ、ぃっ♡」
あまりの快感に霊幻はエクボにしがみつく。
「エクボぉっ♡やだぁっ、優しくしてぇ……っ」
「だぁめだ」
「アッ！」
また責められて霊幻の足が跳ねる。
「しんじゃうよぉ……♡♡♡」
「おー死ね死ね」
「いじ、わるっ！……っあ！」
腕の中で意のままに悶える霊幻は可愛らしくて。
「新隆……」
エクボは何度も口付けながら、その身体を貪った。

※

カチ、とタバコに火をつける。
すうすうとだき潰されて眠る霊幻の前髪を指でいじりながら、エク

ボは霊幻とのこれからに想いを馳せた。
（シゲオには悪いことをしちまったな）
何しろ霊幻はエクボが好きだったのだ。その責任はきっちり取らなければ。
「ん……」
霊幻がうっすら目を開く。
「おはよう、新隆」

キスしようとして。

ふい、と避けられて、エクボの胃の腑にざぁっと冷たい物が落ちた。
「やめろよ。睦言を引きずってんじゃねーよ」
「……は？」
パン、と霊幻が正座して手を合わせて。
「ご馳走様でした♡」
そう言い放ったから、ぽろりとタバコが落ちた。
「お前、だって、俺様のことが好きなんだろ？」
「は？ああ、まあ、同僚としては好きだな」
──やられた。
ギリ、とエクボは歯噛みする。

もう心まで、霊幻に喰われてしまっていた。